

錢形平次捕物全集

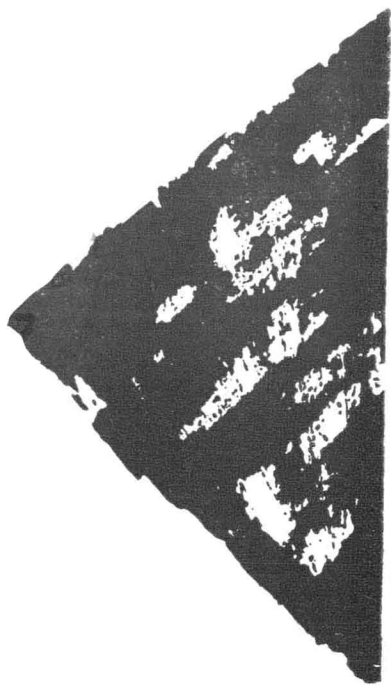
23

分館

野村

錢形平次捕物全集

村
胡
堂



23

河出書房新社

錢形平次捕物全集 23

昭和三十三年十月二十五日 初版印刷
昭和三十三年十月三十一日 初版発行

定価 二九〇円

著者 野村 胡堂

発行者 河出 孝雄
東京都千代田区神田小川町三ノ八

印刷者 矢部 富三
東京都千代田区神田小川町二ノ四

発行所

株式会社

河出書房新社

振替東京一〇八〇二番
電話東京(29) 三七二一八

目次

掌篇三篇	一
姉と妹	二
浮世絵師	三
身代り敵	四
幼馴染の女	六
垣の内外	八
黄金飛来	一〇

通り魔……………二六

女の命……………二〇

お転婆娘……………二七

装　　幀　藤　橋　正　枝

本文カット　黒　須　喜　代　治

掌篇その一

或日の平次と八五郎



「お早ようございます」

ガラッハの八五郎は、格子の外から声を掛けて、小笠原流に上り框に這いあがるのでした。新しい雪駄、新しい足袋、珍らしく素裕ではなく、真新しい襦袢の襟をかき合せて、長火鉢の傍までニジリ上がるのです。

「あれ、たいそう尋常な挨拶じゃねえか。顎をしゃくつて、『今日は』と来なくちゃ、八五郎らしくなくて反って気味が悪いぜ」

銭形平次は、柱に凭れて遠くの春の空を眺めながら、冒

頭からからかい面でした。

「今日はお使者ですよ、親分。本当なら紋付くらいは着てくるところだが、こちとらの仲間には、そんな物を持っているような工面の良い野郎は居ねえから——」

「嫌だぜ、おい、近頃は陽気が悪いから気をつけろよ。どうも眠つきが唯事じゃねえようだが」

「からかつちやいけませんよ。あつしは大真面目なんで。

ね、あつしの訊くことに、一つ一つ掛値のねえ返事をして下さるでしょうね、親分」

「あれ、大きな帳面を出しやがったぜ。何を書くつもりなんだ」

「親分の身分調べですよ、まず第一に——」

「よせよ。俺の人別なんか、お前は皆んな知ってる筈じゃないか」

「知らないことだってありますよ。まず、親分は、源氏か、平家か、それとも藤原氏の出か、そんな事まで訊いて来いって言うんで」

八五郎は古い視箱を棚から取りおろすと、兎の尻尾のような筆を、ポリポリと噛むのです。

「知るものか。親父は岡っ引で、その親父も岡っ引き、三代前までは商人だったというが、源氏か平家か、そこまでわからないよ。——尤も、名前は平次だから、どうせ判

「官様の子孫じゃあるめえよ。俺の祖先は悪七兵衛景清か、新中納言知盛かな、それとも無官の太夫——どっこい敦盛は子がなくて死んだのが本当だとき。太道講釈で聴いたが——」

平次はまだ茶かしております。

「親分は平家がお好きなようで？」

「そんなわけじゃないが、俺は昔から源氏嫌いさ。親子兄弟殺し合うなんざ、褒めたことじゃないよ」

「つむじ曲りですね。あつしなんか餓鬼の時からホウガン鼻頂で、牛若丸でなきゃ夜も日も明けませんよ」

「ところで、そんな事を訊いて何をするんだ」

「ヘッヘッ、あつしの心覚えのためですよ——第二番目に、親分の身上ですがね」

「身上と来やがったな、——お前も知っての通り、お上のお手当は、中間の給金とたいした変りはねえ。角の地面は表の荒物屋のもので、この家は大家のものだ。俺のものとすると、情けねえが長火鉢一つ、薬かん一つ」

「少しサバサバし過ぎますね」

「お前見たいに、借金のないのが取得だ。宵越の銭もねえ代りに、三文の借りもねえのが俺の身上さ。——女房と世帯を持つとき、金がなくなったら、三日でも四日でも食わずにいるが覚悟は良いかと念を押したよ」

「それは惚気ですか親分」

「負け惜みだよ」

「ところで、金の茶釜も錦の小袖もないときめて——、親分の干支は」

「午だよ、——飛び上がりで、臆病で」

「気が早くて、威勢が良い」

「そう言ってくれるのはお前ばかりだ。三世相には、前世にお寺の油を三合借りて返さなかったから、この世では金に縁がないとある」

「武芸の方は？」

「冗談言っちゃいけねえ。そんな隠し芸がありや、今頃はお大名のお取立に預かって、糊米ほどの祿を頂戴しているよ」

「ところで、親分その智恵はどこから湧いて出るか、それを聴かせて下さいな」

「夏場になると、総後架から湧くよ」

「蛆じゃあるめえし」

「まあ、俺の智恵はざっと斯うだ、——お前は今朝こへ来るとき角の酒屋の白犬に吠えられたろう」

「へ？」

「お前は恐ろしく達者な癖に、申の歳生れでもないのに、無類の犬嫌いだ。あの酒屋の白犬はまた、よく吠えるから、

お前は犬を避けて、酒屋の向う側の、足場の下のドブの岸を、大急ぎで通ったに違いあるまい」

「——」

「そのとき左足を踏み外してドブに落ちた」

「どうして、そんな事がわかるんです、親分」

「新しい雪駄の左が泥に塗れて、おまけに漆喰が付いているよ——減多に履いたことのない新しい雪駄を履いたお前は、道の真ん中を歩くにきまっているじゃないか。その新しい雪駄の左足が汚れて、漆喰が付いているのは、左寄りに歩いて、ドブに落ちた証だ。酒屋の向う側に普請が始まって、足場の下は漆喰だらけだし、酒屋の犬はまたよく吠える」

「何んだつまらねえ、そんな事ならあつしだってわかりますよ」

「お前に？」

平次は眼を見張りました。

「あつしだって、それくらいの智慧がありますよ」

八五郎は少しばかり勢い込みました。

「そいつは豪儀だ、八五郎にそんな智慧があるとは思わなかったよ。ちよいと手本を見せてくれ」

「たとえばですね、親分は近ごろグッと女房孝行になったでしょう」

八五郎はこんな時の癖で、長んがい顎を揉み込むように撫でました。

「はてね、俺は昔から女房孝行だが」

「ね、当たてしよ」

「どうしてそんな事がわかるんだ。聴かしてくれよ」

「入口の格子戸が洗ったばかりで、下水の落し穴になっていたドブ板が直って、下駄の鼻緒が新しくなっているでしょう。こいつは男の手でなきやうまく行きませんよ。今朝親分が手伝ったに違いないと思います」

八五郎はなかなかうまい勘を働かせます。

「ハッハッ、ハッハッ、そいつは大笑いだ」

銭形平次は腹を抱えて笑うのです。

「何が可笑しいんです？ 親分」

「いやもう、その智慧なら、総後架にうんと湧くよ」

「蛆と間違えちゃいけません」

「俺もそれくらいの手伝いはしたいと思ってるが、なかなか手が廻らないよ、——本当の事を白状すると、今朝から女房のお袋が来ているのさ。年を取った女はまめだから、格子を洗ったり踏板を直したり、鼻緒まですげてくれたよ。今はちょうど裏の井戸端で洗濯をしている筈だ、覗いて見るが宜い」

「ヘッ」

「八五郎も一言もあるめえ」

平次はもういちど腹を抱えてカラカラと笑うのです。

「ところで八。お前は珍らしい様子をしているが、それはどういうわけだ」

平次は改めて訊ねました。柱に凭れて眺めていると、白い軽い羊の毛のような雲が、フワリフワリと飛んで来て、ときどき縁側をぬくめて、いる太陽を遮るのも、縁側から見る江戸の春のひとこまです。

どこかで昼の鐘が鳴ります。

「当てて下さいよ、親分」

八五郎は横着に構えました。

「足袋の新しいのは、八五郎には珍らしいことだ。雪駄が真新しく、襦袢が仕立おろした、——こいつは唯事じゃないね、見合いか夜逃げか、それとも茶番か」

「情けないね、こいつは皆んなお仕着せですよ」

「お仕着せじゃ自慢になるまい。施主は誰だ」

「お隣りの赤井御門守様御用人、黒川九郎右衛門様ですよ」

「何？」

「銭形平次親分の人別から武芸のたしなみ、心構えまで調べてくれという頼みで、伯母に三両という小判をくれましたよ」

「それを伯母さんが貰ったのか」

平次の声は少し激しくなりました。

「受取ったのは伯母さんですよ、——あっしじゃありません——。伯母さんは心掛けが好いから、いつまでも八五郎に冷飯草履を履かせて、襷垢だらけの肌を着せておくのは可哀想だと、あっしに構わず装束を拵えましたよ。伯母さんに逆らっちゃ悪いから、云いなり放題に着込んで、親分の身許調べに來ましたがね」

「呆れた野郎だ。その黒川九郎右衛門というのが謀叛人で、万一の時の用意に、江戸中の岡っ引の身許を調べるとしたら、お前はとするんだ」

平次はさすがに、妙な疑念にさいなまれます。

「大丈夫ですよ、親分」

「何が大丈夫なんだ」

「でも、赤井御門守様が、銭形の親分の噂をきいて、そんな智慧の逞ましい者を高祿をもって召抱えたい、就ては後日文句の起らぬよう、平次の身許、人別、宗旨、武芸から暮し向きまでも調べてこいと仰しかった」

「——」

「そこで黒川九郎右衛門様が、伯母さんに三両やって抱き込み、あっしに親分を調べさせたというわけですよ」

「ダー」

武家嫌いの奉公嫌いの平次を、召抱えようという赤井御

門守様の茶氣には、さすがの平次も口がきけなかったのです。

春日ウツラウツラとどこかで銅鑼が鳴いております。

昭和二十六年（宝石八月号）

掌篇その二

八五郎婿入

「親分、お早よう」

「お早よう、おや、お前どうかしやしないか。挨拶も尋常だし、着物に折目が付いていて、鬘飾だって真っすぐに今年の恵方の未申の方を向いているし」

八五郎が入ってくる、平次はシャロックホームズのように畳みかけるのでした。

「何んと判じます、親分。あっしのこの様子」

座布団を引寄せて、キチンと坐って、いつものお先煙草ではなくて、懷中から、真新しい自分の煙草入を取出す八五郎です。

「ヘエー、煙草まで御持参か。ちよいと俺の煙草入に似ているが——それにしても驚かせるぜ。まだ松の内には違げ

ねえが、そんな身だしなみは、お前にはないことだ」

「実はね、親分。これには深いワケがあるんで」

「そうだろうとも。伯母さんからお年玉を貰ったくらいじゃ、そうは届くものじゃねえ」

「実はね、親分。今度あっしは、この稼業から、足を洗って、地道な商売を始めようと思ひましてね、一つはその相談に來たんですがね」

「お前が、商売をね、どこから資本が出るんだ。まさか越後屋や鴻の池の番頭になるわけじゃあるめえ」

「さいしよから話さなきゃわかりませんが、あっしもつくづく人を縛る稼業が嫌になりましたね」

「自分の稼業ながら、あまり良い仕事じゃないな」

「そこで、ちよいと小綺麗な商売でもないものかと、心当りに頼んでいると、大変なものが舞い込みましたよ、親分」

「何んだ、鶴と亀とが舞い込んだのか」

「婿の口ですよ、親分。相手の娘は厄が過ぎたばかりの二十歳。訊えたように酒屋の娘で、母親が一人だけ、番頭小僧は多勢いるが、男の心棒がないと、家の締りがつかない。そこで八方から降るほどの婿の口を、娘に相談して見るが、娘がどうしてもウンと言わない。懇意な小母さんに頼んで、そっと娘に訊いて見ると、極り悪いながらも一生懸命で、夫に持つなら、あの八五郎さんのような、——と

いうわけで」

「本当かえ、——その娘は眇目か跛足か、それとも人三化七の恐ろしい不きりようじゃないのか」

「冗談言っちゃいけません。あっしは怒りますよ」

「それとも、夜中に首がニヨロニヨロと抜け出すと言った器用な病気があるとか」

「とんでもない。江戸一番のきりようという程ではないが、先ず町内でも指折りの綺麗な娘で、第一親孝行で、心がけがよくて」

「そうだろうな、お前に惚れるようじゃ、よっぽど人の好い娘だろうよ」

「地所もあり家作もあり、店はいした繁昌だ。それに娘の方から望まれたが、あっしも十手の義理にこだわって、いつまでも巾着切や小泥棒を追っかけてもらえません。親分には済まねえが、いよいよこの商売を止して、酒屋の亭主になることに決めましたよ」

「本当かえ、おい。何んだか俺はかつがれて いるようだぜ」

「ところで、話はトントン拍子に運んだが、肝腎の仲人がねえ。それでは銭形の親分を頼もうという、向うでも大喜び。ぜひお願いしてくれというから、あっしが出かけて来たわけで、御面倒でも、宜しくお願い申します」

八五郎はビヨコリとお辞儀をします。

「おい、何んだか俺は狐につままれているようだが、——まあせっかく八五郎が改まって来たんだから、柄にはないが引受けて、高砂やアとやらかそう。ところで、お前を婿に欲しいというのは何処の酒屋さんなんだ。娘は何んと言う名だ、この辺には心当りはないが——」

「そんな娘があったら、世話をして下さいという話で」

「何んだこの野郎、そいつは皆んな嘘か」

「嘘じゃない夢で」

「夢？」

「宝船の売れ残りを総仕舞いにして、枕の下に五枚と敷いて寝たら、そんな夢を見ましたよ」

「呆れてモノが言えない、それにしてもその身扮はどうしたんだ。袷は折目がついて真新しいし、帯だっていつもの山の入ったのとは違っているようだが」

「——」

お勝手の方からは、お静の嘸み殺した笑いが聞えます。

「何んだお静、お前は先刻から、お勝手に転げ廻るほど笑っているようだが、何がそんなに可笑しいんだ」
平次はお勝手を大きくしたしめました。

「だってお前さん、私は可笑しくて、可笑しくて。八さんの着ているのは、皆んなお前さんのものですよ」

「何？」

「元日の朝——お前さんが年始廻りに出かけた後で、八さんがやって来て、暮には親分も工面がよかったから、ちょっと着のひと揃いぐらいいは、お蔵から出してあるに違いない、久し振りで草加の叔父さんのところへ挨拶に行くから、一日だけ貸して下さい——というお話なんです」

「何んの事だ、八五郎の着ているのは、皆んな俺の装束か」

「そうなんです。袴も、羽織も、帯も、煙草入れも」

「呆れた野郎だ。道理で、見たことのある柄だとは思ったが」

「呆れたのは此方ですよ、親分」

八五郎の鼻は蠢きます。

「何を呆れるんだ」

「江戸一番と言われた智恵者の銭形親分も、自分の着物の柄は知らなかったとね」

「だからお前は馬鹿だというんだ。自分の着物の柄なんか、男は知るものか」

「なるほどね、——その心掛けじゃ、親分なんかは人混みで姐さんに逢って、——おやどなたでした、見たことのあるような顔だが——と自分の女房に挨拶する」

「まア八さん」

お静はきまり悪そうでした。

「気をつけて下さい、姐さん。親分はそう言う人だ」

「安心しろ、女房を見忘れそうになったら、外へ出るとき鼻の頭に墨で印をつけて置けよ」

和かな春の陽が座敷に這って、鉄瓶が長閑に唄っており、驚の音が——。

昭和二十七年一月（寶石）

三その掌篇

八五郎手柄初め

上

明神下の銭形の平次の家へ通ると、八五郎は開き直って年始のあいさつを申し述べるのです。

「明けまして、お目出度うございます——。昨年中はいろいろ」

「待ってくれ、その口上はもう三度目だぜ。ごていねいには腹も立たないというが、お前の顔を見る度毎に、一つずつ年をとりそうで、やりきれたものじゃない。頼むから世間なみのあいさつをしてくれ」

もっとも、三度目の年始にきた八五郎は、かなり酔^よっておりました。

「相すみません、悪気じゃなかったんで。余計ぶんの口上は、来年の年始に廻しておいて下さいよ。何しろ、目出度の目出度くないのって、今年の正月は別あつらいで——」

「正月に出来合いも別あつらいもあるものか」

「そうともいえませんよ。今年の正月は、減茶減茶な大当りで、私はもう」

八五郎は長んがいあごをなでまわして、髻^{きん}節^{ふし}でのの字を書くのです。

「たいそうなきげんじゃないか、新色でも出来たのか」

「そんなものは珍^{めづ}らしいありませんよ。古い借金と新色はついて廻るが、小判なんというものは、減多なことじゃちとらの身についてくれません」

「何んだと、お前はまさか、小判を手に入れたわけじゃあるまいな」

「ところが、確かに小判を手に入れたに間違いありませんよ。天道様に照らされても、とたんに木の葉にもならず、両国で一杯飲んだのが崩^{くず}し始めて、柳原の土手を酒屋と小料理屋を一軒一軒飲み歩いて、七、八軒目にここへたどり着きましたが、小判というものはつかい出がありますね、親分」

ペロリとくちびるをなめて、両掌^{りょうて}を宙に泳がせる八五郎です。

「あきれた野郎だ。そんな金をどこで拾った、まさか、盗んだわけじゃあるめえ」

「あれ情けない。たまたま稼^{かせ}いでもうけた金を持っていると、こうも疑^{うたが}えられるものですかね、貧乏人は」

「一両は大金だ。お前にそんな働きがあるわけはねえ」

「いよいよ驚いたなア。こう見えても、智恵を働かせて稼いだ金で、どこへ出しても、きまりの悪くない一両小判ですぜ」

「それじゃ、聞いてやろう」

平次はむずと腕を組みました。八五郎の人の好きはわかり過ぎるほどわかっておりますが、万一にも間違いをさせたくない、平次の潔癖^{けつぺき}さの現われです。

「わけを話すところですよ。本所花町、三つ目通りに、江島屋という万両分限^{ぶげん}の材木屋のあることを親分もご存じでしょうね」

「知ってるとも、先代は七兵衛——良い男だったが、仕事に熱心な男で、敵を作り過ぎたから悪^{あく}七兵衛と言われた。何んでも一年ばかり前に、日光御造營のことで間違いがあったとかで、行方不明になったはずだが、だれでも知ってるよ」

「その七兵衛の義理の弟——半三郎というのが今の主人で、相変らず材木屋をやっているが、昔のようなことはありません。——ところで、その先代七兵衛の娘に、納さんという、取って十八になる娘がある。母親は三年前に亡くなり、父親は一年前から行方知れず、叔父の半三郎の厄介になっているが、近ごろはいろいろのわけがあるらしく、花町の江島屋を出て、父親の七兵衛が好きだった、亀戸の天神様の近く、亀戸町のたんぼの寮に一人でさびしく暮している、——というが、それがたいした好い娘で」

「お前にいわせると年ごろの娘は皆んな美人だ」

「ところで、このあいだ亀戸の天神様へ初もうでに行ったとき、——今年の恵方は東の方でしょう、久し振りに臥竜梅でも見ようと、たんぼ道を入ると、江島屋の寮の庭へ出た。私といっしょに行ったのは三つ目の竹の野郎で、——あとで聞くと、かねて銭形の親分か、その子分の八五郎を誘って来るようにと、江島のお嬢さんに頼まれていたんですって」

「で？」

「竹の野郎は、銭形の親分にはいい難いからと、あつしで間に合わせたといいますがね、間に合わせは気になるじゃありませんか」

「まあいい、その先を話せ」

「お嬢さんに逢いましたが、好い娘ですぜ。少しやつれてはいるけれど利口そうで、愛嬌があって、縁側へ向い合って掛けると、日向で梅の花がブーンとおう」

「話はいくどいな」

「お嬢さんは、あつしに一枚の紙をひろげて見せるのですよ。一年前行方知れずになった父が、姿を隠す前に、私にこの紙片をくれて、一年経ってから見ろ——といいました。一年経って見たけれど、私には、何が何やら少しもわからない、お願いだからこのナゾを判じて下さいと」

「何が書いてあったのだ」

「文字はたった十一、こいつは皆んな日本の字だから、あつしにだって読めませう。——たしのしい、けたはのらう——とね」

「何んだ、そんなことか」

「親分なら、直ぐわかるでしょう。あつしは小半時考えましたよ。幸いお嬢さんと向い合っていたので、その紙片を逆に見たから、一ぺんにわかりました。何んだ、下から読めばよかつたんで」

「なるほどな。——裏の畠、石の下か——まるで子供だしじゃないか」

「でも、このナゾを解いてやると、お嬢さんは喜びましたよ。今まで二、三人に見せたが、だれも解けなかった。そ

れでは裏の畠の石燈籠の下に父親が、なんか埋めたに違いない。日光山御造営のことで、江島屋取潰しのうわさのあったころだから何千両という金を埋めたかも知れないと」

「それは大変なことだな」

「さっそくお嬢さんにすめられてあっしが、くわ始めに掘りましたよ」

「なにか出たのか」

「石燈籠の下から出たのが、小判一枚、お嬢さんに差上げると、これは八五郎親分の智恵と働きで掘ったものだから、骨折り賃に収めてくれと、どうしても受取らない」

「なるほど、それで両国から明神下までハシゴ酒をやったのか、あきれた野郎だ」

「ところが、それからが大変で」

「何が大変だ」

「お嬢さんが、裏の畠を勝手に掘っても構わないといいだしたからたまらない。本所中の弥次馬が、二、三十人も押しかけ、鉄まで持出して、江島屋の寮の裏を掘り始めましたよ。世の中には、慾の深いやつは多いもので」

「お前だって浅い方じゃないぜ。その一両を江島屋へ返して来い」

「二分しきや残っていませんよ」

「使った分は俺が出してやる。——ところでお前は、その

謎を書いた紙片を持って来たのか」

「これですよ、いい手でしよう」

平次は八五郎が懐ろから出した、もみくちャの紙片のしわを伸ばしました。半紙一枚、細い文字で優しげに書いた仮名文字は、妙に平次の神経に響きます。

「これは女の書いた字だよ。それに腑に落ちないことばかりだ。お前が行ったのは何時のことだ」

「今日ですよ、——はんの今朝ほど」

「まだ陽は高い。ちょいとのをぞいてみよう」

「江島屋の裏は大変ですよ」

平次は八五郎に案内させて、亀戸まで飛びました。

下

「あの通りだ。親分」

亀戸へ着いたのはもう夕方、薄暗くなりかけた江島屋の寮の裏、畑の中にかがりまでたいて、五、六十人の弥次馬がひしめき合っているのです。

その弥次馬の中には鉄まで持ったのがあり、それぞれの道具を持ったのや、それとはなしに棒切れなどを持ったのや、老若男女をこみにして、石燈籠を中心に、二、三反歩の畑を、メチャメチャに掘り荒しているのです。

「さアさア、帰ってくれ。だれに相談をして、人の土地を

掘り荒すんだ。もぐらの真似はもうごめんだ。さっさと帰らないと、お上の手をかりて退散させるぜ」

縁側の下に突っ立って、ふんぶんたる声を張り上げるのは、江島屋の当主の半三郎でしょう。四十前後の精力的な赤い顔、こんな男は、本当にどんなことでもやりかねないでしょう。

「お前が悪いのだ、何んだってこんなことをさせたのだ。今時の畠の中からはみみずも出るわけではない。サア何んとかいえッ」

振り向くと半三郎の後ろには、打ちのめされたように、若い娘がふるえております。先代の娘——八五郎に謎をとかせた納^{なまめ}というのでしょうか。青白いが品の良い顔、打ちしおれておりますが、かおをあげるときっとした教智がまゆの間をはしって、美しくはあるが、何様ひとかどのものを感じさせる娘です。

「さア、皆様、叔父さんがあんなに申します。どうぞ帰って下さい。そこにはもうなんにもありません」

という声も、半三郎にしいられて、幾度くり返したことから、もうたえだえです。

「いや、つづけてもらおうか。その石燈籠^{いしとうろう}の下にはまだ鍼は入らない、燈籠はどかせてもいい」

こう声を掛けたのは平次です。ここへ飛び込んで平次

は、弥次馬の群れを前から手をあげてこういふのです。「お前はだれだ。何んのわけがあつて、そんなことをいうのだ」

「明神下の平次だよ。——さア、皆の衆、もう一といき」石燈籠は引っくり返されました。四つ五つ提灯^{ちとうちん}が集まりました。石燈籠の真下を二尺三尺と掘り下げると、

「あ、出た」

それは小判でも千両箱でもなく、荒むしろにつつんだ人骨、半ば晒^{さら}れた、浅ましい死がいではありませんか。

弥次馬の一群はドツとちりました。

「八、江島屋七兵衛殺しの下手人、半三郎を逃すな」

平次は声を掛けると、

「御用ッ」

八五郎は獵犬^{りようけん}のように飛びついて、威張り返っている半三郎を取って押えたことはいうまでもありません。

「——」

振り返ると、縁側に降りた先代の娘の納^{おなめ}は、平次の方を伏し拜んでおります。何が何やら、わけもわからぬ弥次馬は、八五郎の声に驚いて夕やみの中にバラバラと散って行きます。

×

×

「これはいったいどうしたことなんです親分」

半三郎を土地の御用聞に引渡して帰る途、八五郎はたずねました。

「一年前の日光山御造営の間違いは、半三郎のこしらえ事だったのさ。あとで七兵衛の無実はわかったが、その時はもう七兵衛は行方しれずで、江島屋は半三郎が乗取っていたのだよ。娘の納は、父親が半三郎に殺されたに違いないと思ひ、——一年前寮へ半三郎といっしょに来たっきりから行方知れずになったので、裏の石燈籠の下に土まんじゅうが怪しいとにらんだ。小娘の力でそれを掘るわけに行かず、そのうえ近所には半三郎がにらんでいる。そこで、へんな謎をこしらえてお前を呼び寄せて、謎をとかせた上、石燈籠の下を掘らせたのだよ。あの謎はあんまり下手過ぎたし、字は優しい女の子の筆蹟だ。——お前でもとける謎は、まずあんなものだろう。——そして多勢の弥次馬を呼んで、石燈籠のまわりを掘らせたのだ」

「ところで半三郎は？」

「七兵衛殺しの大悪党だ。それを器用にしばらく納という小娘はたいしたものだよ」

「あっしの初手柄もたいしたものでしょう」

相変わらず、アゴをなでる八五郎です。両国の橋の上、夜の水を渡って、筑波おろしが頬をなでます。

昭和三十年一月（地方新聞）

姉と妹



「お早ようございます、親分は？」

八五郎が春の陽を浴びて、ケチな門松の前に立ったのは、やがて昼近い正月の三日のことでした。

「ま、八五郎さん、——待って下さいな」

平次の女房のお静は、少しあわてて浅間な家の中に飛び込みました。肝腎の亭主が、まだ起きてくれなかったのです。」